751

特243
801

三六年の危機と海國日本の使命

海軍大佐 武富邦茂
海軍少將 原五郎 講述

大毎講座 2

大阪毎日新聞社
東京日日新聞社

始

特243
801

三六年の危機と海國日本の使命

軍令部出仕海軍大佐 武冨邦茂
艦政本部造船造兵監督長海軍少將 原五郎 講述

大阪毎日新聞社・東京日日新聞社

昭和九。帝國

目　次

海國日本の使命と軍艦旗　軍令部出仕　海軍大佐　武富邦茂……一
三六年の危機に對するわが海軍の覺悟　艦政本部造船造兵監督長　海軍少將　原五郎……五三

海國日本の使命と軍艦旗

軍令部出仕海軍大佐　武富邦茂

今夕は大阪毎日新聞主催の講演會に圖らずもお招きをうけましてたゞ今御當地に到着した武富でございます。皆さんにお目にかゝることが出來まして、しかしてこの機會に海軍に關する私の所見の一端を開陳させていたゞきますことを甚だ光榮とするものでございます、暫くの間御清聽を煩はします。

時局の重大なることは今更申すまでもないことでございます。しかしながら眞に重大なる時と申しまするのは寧ろ今後にあるのでありまして、いはゆる國際難關のクライマックスが、將來にあるとかういふことも誰れしも考へてをることであります。しからばその最大の難關はいつ來るかといふことになりますると、人各々見るところを異にしてをりまするが、大體において明年、

明後年、すなはち一九三五、六年のころがさうではなからうかといふことにも意見の一致を見てをるやうであります。

何がさやうに國際離關を作るかといふことにつきましては私は申しあげませぬが、たゞその項目だけを念のために申上げて見ますると、第一は、私どもは明年三月の廿六日をもつて國際聯盟を名實ともに離脱しなければならぬのでございます。御承知の通りに今日は、われ〳〵は聯盟脱退の通告を發してをりますが、いまだ法律的に多少の拘束を受けてをるのであります。その拘束が明年の三月廿六日をもつて完全に解除するのであります。この時期を私どもは警戒してをるわけでございます。何故に警戒するか、いふまでもなく滿洲問題の蒸返しが來るその可能性を認めてをります。次に南洋の委任統治の問題につきましてもこやかく難問題が振りかゝる、これまた多分に可能性を認めてをるわけであります。滿洲は帝國の國策の重大なるものでありまして、このことに關しましてはどんなことがあらうとも一歩も退くわけには參りませぬ。これと同樣に南洋委任統治もわが國にとつて國防生命線である以上は、如何なることがあつてもこれは手離すわけには參らぬのであります。

次には、これまた御承知の通りに、ワシントン條約、ロンドン條約の滿限期が一九三六年十二月卅一日をもつて來るのであります。これに先き立つて、明年は新に軍縮會議が開かれることになつてをります。この軍縮會議を私どもは最も重大視してをります。如何ならば、この會議において恐らくはアングロサクソンの優越性を振りかざして、わが國に臨んで來るのではなからうか。さやうなことがあつては私どもは最早や忍び難いのであります。いよ〳〵決心の臍を極めてかゝるわけでございますから、この時期を極めて重大視してをるのであります。

更に大陸方面をごらんになりまするとロシアの狀況は如何、私が說明するまでもなく重工業の奬勵發達、しかして軍事能力の增進にこれ日も足らざる有樣でありまして、更に軍隊の多數を極東方面に廻してをります。これは事實であります。なほまた浦鹽におきましての兵力の蓄積、これまた私どもは看過——そのまゝに默つて見てをるわけには參らないのであります。なほまた隣邦支那における外國の勢力の進入は非常なものでありまして、これまた浦鹽同樣、私どもは雲煙過眼するわけには參らないと思ふのであります。更に太平洋の彼岸のアメリカ合衆國の狀況は如何、今日のアメリカの全艦隊は、太平洋からパナマ運河を通過して大西洋に廻航してはをります

るが、これで私どもは太平洋方面の國際難關が解除された、乃至緩和されたとは決して見てゐないのであります。如何とならば海軍の移動することは當り前のことであります。海軍は陸軍と違ひまして、移動するといふのが本質なのであります。陸軍は申すまでもなく一地に駐屯致しまして徴募と教育訓練の場所をもつてをりますが、海軍は全國にわたつて、世界に跨がる海を教育訓練の場所としてをるのであります。舊幕時代におきまして、林子平は日本橋に立つて「この江戸の水はロンドンに連なつてゐる」と申しましたが、私どもは世界に連なる水を自分達の舞臺としてをるのでありますから、本來海軍は移動してゐる兵力といふことを本質としてゐるわけであります。この移動兵力の海軍が――米國の海軍が、太平洋岸から大西洋岸に移動したからといつて何んの變哲もないわけであります、當り前のことだ、さやうに私どもは見てをります。況んやこの米國の海軍は、大西洋に行つていろ〳〵目的を果しまして、今年の十一月頃には再びパナマ運河を通つて太平洋に歸つて來るといふことを彼の當局者はいつてをるのでありますから、決してこれは安心の種にはならないのであります。

以上申上ましたやうな國際情勢を考へて見ますると、二、三年の後には私どもも餘程覺悟せな

ければならぬ、場合によつては有史以來いまだかつてなき最大國難が、われ〳〵の頭の上に被さつて來るのではなからうかとさへ考へるのであります。

今日はまさに準備時代です。これに對してわが海軍はどういふことをやつてゐるか、一言にしていへば今日こそ眞劍味を發揮してをるのであります。無論、今日までもわれ〳〵は一生懸命になつてをりましたが、今日ほど生命を打込んでやつてゐることは恐らくなからうかと思ふくらゐであります。これは私のことでありまして、皆さんに申上げて良いか惡いか私は甚だ判斷に苦しんでをりますが、序ながら御紹介申上げたいことがあります。それは私どもの後輩の人で、豫て私が弟のやうに可愛がつてゐる若い海軍士官の某中尉でありますが、これが最近に遠い外國へ參りますために、陛下に拜謁を仰せつけられまして、さうして參内致しました歸途、私のこころへ寄つて一晩を過したのでございますが、その晩私に對しての話が次の通りであります。彼れ曰く「今日御所で涙がほろ〳〵出た」と、かういふのです。「何故か」と私が尋ねましたならば、「今日が拜謁の最後かと思ふと涙が出てしようがなかつた」と、かういふのであります。私がどうしてさやうに思ふかといへば、「どうせ私達の生命は一、二年のものですから――」と、かうい

ふ、一、二年の生命である、長くて二、三年のものだとかう思ひ込んでゐるのがわが海軍の青年將校である。かやうな氣持で今や猛烈果敢な訓練をやつてをります。

世の中の事でも、ある個人が眞に自覺して發奮すると相當の仕事を致します。況んや幾萬の海軍の將卒がこの非常時を自覺し發奮して、一心同體になつて働いたならば非常な大仕事が出來ると思ふのであります。非常時局といふものが我海軍をして一層躍進せしめて居るのであります。

わが海軍は今や準備中でありますが、この海軍の準備と申しますると中々一朝一夕では出來ませぬ。たとへば優れた軍艦を造りますにも少くとも二年はかゝります、少し大きな船になりますと三年の日子を要します。しかもこの軍艦、兵器、彈藥を使ひこなす人間の訓練に至つては、これまた二、三年の日子を要するのであります。相當長い年月を要するのが海軍の實力養成であります。いざ國難が湧いて出た、直にこれに副ふ準備をせよといはれても、中々さうは參らぬのであります。今日私どもは將來の國際難局を豫期して、まさに非常重大な決心の下に、準備をしてをる時代であります。

かういふ重大なる時期に當りまして、大阪毎日新聞社および東京日日新聞社が發起されまして

全國有志の義金を集められて、これをもつて軍艦旗を作られて、さうしてわが海軍に獻納しようといふこの運動を私どもは聞きまして、衷心感激してをる次第でございます。この軍艦旗獻納といふものは、物質的に海軍を援助するといふ以外に、私どもはこの軍艦旗に織込まれてゐる、多數の國民諸氏の愛國心を頂戴することが何より有がたいのでございます。物そのものは大したものではありませぬが、然しこの、物に織込んであるあなた方の、愛國の至誠を海軍が頂戴することが實に有がたいのであります。この至誠によりまして、私ども海軍の軍人は如何に刺激されるか、この刺激によつて將卒の士氣は一層緊張することを信じて疑はないものであります。

次には軍艦旗の特色を申上げて見たいと思ふのでありますが、それに先き立つて軍艦の尊嚴といふことについて、ざつと説明を申して見たいと思ひます。

帝國軍艦の外國におけるいろ〳〵の事柄を定めてをりまする一つの規則がありますがこれを軍艦外務令と申してをります。この軍艦外務令の第三條には、次のやうなことを掲げられてをります。

第一は「軍艦は外國政府の干渉をうくることなし、若し外國政府が強ひてこれに干渉を加へんとせば兵力をもつてこれを拒むことを得」と書いてあります。

第二には「帝國軍艦は外國の法權に服從せず從つて外國の警察權、裁判權、臨檢搜索等の艦内に行はれることを許さず」

第三は「帝國軍艦は外國において納稅の義務なし」

第四は「帝國軍艦は主權に伴ふところの尊敬と禮遇をうくるものとす」

以上の通りに規定されてをります。

この軍艦外務令によつて、わが帝國軍艦は外國領域において、その尊敬と、および之に伴ふ禮遇をうけつゝあるのでございますが、この無上の取扱をうけるところの帝國軍艦は、何を旗印としてをるかと申しますと艦に掲げてある日章旗であります。これすなはち軍艦旗であります。私ども帝國軍艦は、外國領域において艦の旗竿に掲げてゐる色鮮やかなる軍艦旗によつて、明かにその内容を外國人に示し、從つてそれによつて尊敬をうけてをるのであります。日本の軍艦は御承知の通りに艦首の方には菊花御紋章がついてをります。これは申すまでもなく「天皇陛下の御船なり」といふ印であり、艦の方の旗竿に日章旗が掲げられてゐるのは「大日本帝國の船である」といふことを示してをるのであります。わが國におきましては、陛下の御船即ち國家の船で

ございます。

この軍艦旗は、碇泊中は午前八時にこれを掲げまして日沒時に引卸すのであります。この規定は單り日本ばかりではなく、世界の全海軍はその通りやつてをるのであります。無論これを致します時は、衛兵隊を立てつけてその國の國歌を奏し、さうして嚴肅なる敬禮の下に行ふのであります。航海中は晝も夜も掲げてをります。これが碇泊中と違ふところで、航海中は晝であらうと夜であらうと四、六時中旗竿に掲げてをります。どんな暗黑の夜を航海する時でも、後の旗竿には日章旗がへんほんとして飜つてをるのであります。

國民のある一部分には、軍艦旗と陸軍の聯隊旗とを同一に見られてゐる向きもあるやうでございますが、これは餘程趣きを異にしてをります。聯隊旗は申すまでもなく畏くも陛下より親授されるものでありまして、その聯隊の生命とも呼ばるべき極めて尊嚴なるものであります。ところが海軍の軍艦旗は陛下から親授されるものではないのであります。如何ならば、これは非常に澤山な數を要するのであります。何しろ晝も夜も、如何なる寒暑風雨を問はずいつでも掲げて置くものでありまして、從つてその破損の程度も一通りではなく、これを扱つてゐる信號兵なぎ

は、軍艦旗の縫綴ひに中々忙しいほどでございます。この數多い軍艦旗でも、私どもは常に大切に取扱つてをりますが、一度旗竿に掲げましたならばそれは聯隊旗同樣の尊嚴さを示すものであります。この軍艦旗は戰爭になりますと、艦の旗竿から今度はマストの一番頂上に掲げ變へられます。この時には軍艦旗は「戰鬪旗」といふ名に變るのであります。戰鬪する時の旗印である、昔戰場において戰さをする時に、各々自分の家柄、姓名を名乘つて斬合つてをりましたが、帝國の軍艦は海上において敵艦隊と相對する時には、マスト・ヘッドに日章旗を掲げまして、それを旗印として戰ふのであります。昔御當地の近所において戰さがありましたことを私は記憶してをります。梶原源太景季は箙に梅の枝を差して戰つたさうです。帝國の艦隊はマスト・ヘッドに日章旗を掲げて、帝國軍艦としての標識を明かにして戰さを致します。この戰鬪旗につきまして面白いエピソードが一つありますから御紹介致します。

すでに皆さん御承知のことと存じますが、そのことは今を去る廿九年前、丁度明治卅八年の五月廿七日、日本海海戰の折に、聯合艦隊の先頭に立つ旗艦三笠、申すまでもなく東鄕司令長官が艦橋に立つて全軍を指揮されてゐる、その重大なる使命をもつてゐる軍艦三笠の奮戰の有樣につ

いては今更私が申すまでもないことで、御承知のはずでありますが、丁度その日の午後二時十分か十五分ごろ、すなはち戰鬪の初期にあたり、三笠が敵前八千メートルにおいて內側に向つて取舵を取つて、一齊回頭を致しました時に敵彈の集中を受けまして一時苦戰に陷りました。三笠は敵戰鬪艦の數隻の集中砲火を蒙つて、この巨彈の水煙と炸裂する命中彈の煙のために、少時の間はその艦影が見ねなかつたさうです。この苦戰の中において不幸にも、マスト・ヘッドに掲げられてをります軍艦旗が擊落されました。トップ・マストが敵彈のために擊落されたので、其頂上に掲げられてをります戰鬪旗と、東鄕大將の所在を示すところの大將旗が一時に甲板の上に落ちたのであります。こころがこゝに氣の利いた兵隊がをりまして、その人を柏森信號兵曹と申しますが、この人が、今回の戰さは三笠が一番苦戰に陷り、最も惡い狀況に立つといふことを豫期致しまして、萬一マストを折られて大將旗や戰鬪旗が落ちるやうなことがあつたならば、全軍の士氣を非常に沮喪せしめる。若しもかやうな場合があつたならば自分が眞先きに馳登り、新しい戰鬪旗をかけかへてやらうと豫め用意してをつたのであります。そこで今この苦戰中に旗が落ちたので、彼れはこの時とばかりにマストに登つたのであります。この柏森兵曹について、あとから

よぢ登つた氣の利いた甲板應急作業員といふやうなものが十人ばかりで、瞬く間に短いマストに柏森兵曹が腰にしてをりました新しい代りの軍艦旗を掲げましたのであります。そこで三笠のこの回頭が終つて新たな序列の先頭に立ちました時には、マストは中間から折れてをりますけれども、明かに戰闘旗と大將旗は揚つてをつたのであります。この姿を見ました全軍の將士は、一層緊張して士氣はます〳〵奮つたさうでございます。戰闘旗といふものはかやうな精神的影響を全軍に與へるものであります。

なほまた私ども海上生活者、常に軍艦に乘つてをりますものは、外國に行きますやうな場合のために新らしい軍艦旗を必ず用意してをります。外國の港に入りました時には、一番新らしい軍艦旗を常に掲げてをります。丁度あなた方が平常着と外出着の着物を區別して持つてをられると同樣、私ども常に新らしい軍艦旗は保存して大切にしてをります。

またこの軍艦旗といふものは、わが軍勝利となつて敵艦隊を捕獲するやうな場合には、わが捕獲隊員が軍艦旗を携行致しまして、眞先きに敵艦に登つて行つて敵の軍艦旗を卸して、日本の軍艦旗とかけかへるのであります。これまた今を去る廿九年前の明治卅七年五月廿八日、今度はさ

きの廿七日の翌日でありましたが、かのバルチック艦隊の撃ち漏らされた所謂敗殘艦隊を、わが聯合艦隊が鬱陵島の東方海面において包圍致しまして、さうして最後の一撃を加へたところが、彼の艦隊司令長官ネボガトフといふものが信號を揭げました、わが艦隊でこれを讀みますと「XGL」といふ信號でありました。この信號が日本軍艦の持つてゐる萬國信號書によつて調べましたところ、あに圖らんやこれは降參するといふ信號「サレンダー」といふのであつて、日本の軍人には夢にも思つてゐない信號が、信號書の中に現はれて來たのであります。そこで、こちらの方からは早速捕獲隊員を編成して、さうして捕獲の手續きをとりました。この捕獲隊員は何を持つて行つたか、第一に日本の軍艦旗を持つて行つたのです。さうしてこの降伏敵艦によぢ登つて行つた最初の人が、眞先きにこのロシアの軍艦旗を卸ろして日本軍艦旗を揭げたのであります。このことを考へますと、あなた方が大阪毎日新聞社のこの運動に參加されまして、あなた方の愛國至誠の籠つた軍艦旗、この新らしい献納軍艦旗は將來萬一、不幸にも太平洋で事があつた場合わが艦隊の大勝利となつて、その折敵降伏艦隊に、我が捕獲隊員が持つて行つて揭げる軍艦旗ではなからうかと思ふのであります。

私は軍艦族についてもう一つ思ひ出をもつてをります。それは今を去る七、八年も前のことでありますが、私が特務艦の神威といふものでアメリカの方に重油を買ひに行きました。まづシアトルといふところに參りました。御承知のやうにシアトルはずつと入江になつてをります。ジャンテブウカといふ入江があります。私の乘つてゐる船がこの入江にさしかゝり、さうしてシアトルの方に針路を向けましたが、その中途において思はずもアメリカの大艦隊と出遭つたのであります。双眼鏡を通して前方にアメリカの大艦隊らしい影が見ゐますといふのであります。ジャンテブウカといふところは蜃氣樓がたつ有名なところであります。霧があつて前方の視界が十分でないところであります。それが霧を透してアメリカ艦隊らしいものが私の船から見ゐたのであります。私も注意して見たが、果してアメリカ大艦隊でありました。この大艦隊が三列縱陣をなして私の船と正反對の針路をとつて丁度眞向ひに互ひに接近しつゝあつたのであります。私の船はこの眞中の列にまるでぶつつかるやうな恰好をしてをりましたが、距離が相當ありましたために私は乘組員全部を集めてこれに對して　場の訓示を致しました。その要領は「お前達も見る通り本艦の前方にはアメリカの大艦隊がこつちへ向つて來つゝあるのだ。これはどにかくわれ〳〵と

しては非常に良い機會であるからお前方もよく見てをれ。國際的儀禮の交換は無論あるから、その積りで居れ。だからこちらは爪彈されるやうな缺點があつてはならぬ、船は出來るだけ立派に拭ひ掃除をしろ、綱が下がつたりしてはゐないか、金物はピカ〳〵光らして置かねばならぬ、甲板の掃除をしておけ、お前達自身も立派な着物、一張着と着替へろ、帽子も塵を拂つて靴も磨いて置け、それだけのことをこの十分間にやれ」と命令しましたが、瞬く間にそれこそ艦内が整頓されて、皆立派な着物を着替へて所定の位置に整列を致しました。やがて私の船は相手の大艦隊の眞中に今にもぶつつかりさうになつてゐます。けれども私共は決して針路を譲りませんでした。こちらはたつた一隻、向うは何十隻の集團でありましたけれども、私共は譲りませぬ、ぶつつかつてもよい——何んとか變ると思つてをりましたからずつとそのまゝ行きました。近づきますと眞中の列は、例のわが帝國軍艦の陸奥、長門と同じやうなウエストバージニア、メリーランド、コロラド、カリホルニア、テネッシー、アイダホといふやうな有力な戰艦を配してをります、向つて右の列には多數の驅逐艦がずつと列び、左の方には輕巡洋艦が列をなしてをります。よく双眼鏡で見ますと、米國の大艦隊は司令長官らしく思はれる方が白手袋をはめて、さうしてブリ

ッチ高くをるのがわかります。艦長以下皆揃つてをる、その下に軍樂隊がちやんと整列してをる兵隊といふものは手空きのものは皆所定の位置に整列してをるのであります、先頭の旗艦がさうでありますから、更らに私は總ての船を見渡しましたところが何れも最大の敬意を拂つてゐるやうで甚だ私共も氣持が良かつたのであります。やがて近づきました、距離およそ四百メートルと思はれるところで、丁度その時、私の耳に入つて來たものは何かといへば、これはワエストバージニアの大戰艦から奏する君ケ代であります。私は總員に「氣をつけ」をやつてこれに向つて答禮を致しました。さうして二つの船はすれ〳〵に通つたのであります。すると二番目のメリーランドも一番艦同樣の敬意をもつて迎へて吳れたのであります。三番艦のコロラド、これも同樣君ケ代をもつてわれ〳〵を迎へて吳れました、次から次へと最大敬意をもつて迎へられ送られたのであります。更らに右の端の列も、また左の端の列からも、各々國際的最大の敬意をうけましてさうしてこの大艦隊の眞中ごろに差しかゝつた時、即ち星條旗を以て滿されてゐる眞ん中で、私は自分の船を省みましたところ、我が神威の艦には日章旗の鮮やかなものが揭げられてをつたのであります。我が軍艦旗のへんぽんとして飜へるのを私は見まして涙が出ました。さうしてはじ

めて自分は日本人であるといふことがよくわかりました。「私どもの後ろには日本といふ大なる國家があり、こゝには天皇陛下といふ絶對なる尊敬者がをられる」といふことを明かに認識することが出來たのでございます。

かやうな次第でこの艦隊とは別れましたが、シアトルといふ港に入つて私の船が横着けして一週間といふものは、在留同胞から衷心歡迎をうけまして過したのでございます。出發の前日に在留同胞の五、六百人を集めまして、私の船で「アット・ホーム」といふものを致しました。その時丁度日沒時に差かゝりました。私が皆さんに申上げました「あなた方と御一緒に君ケ代で軍艦旗を拜まうぢやありませぬか」と、かやうにして皆んな上甲板に集まり日沒時の來るを待つてをりましたが、やがてその時刻になると信號兵の奏する國歌君ケ代のラッパにつれて、軍艦旗がする〳〵と艦の旗竿から降りたのであります。皆は、同胞數百人の人は頭を垂れて、心の底から聞いてをりました。この軍艦旗の敬禮がすむとその瞬間に、向うの右の方から君ケ代の軍樂隊の奏樂が聞える、何ものかと私見ますること、私の船の向うの棧橋に繫いでありましたドイツの新らしい軍艦エムデンから、わが帝國軍艦に對する敬意であつたのであります。自國の旗を卸したあと

に、隣りにをるところの日本の軍艦に對して敬意を表したのでございます。私は「エムデンから今日本國歌を奏して敬意を表してをります」と皆に申しましたが、何百人をりました同胞はそつちの方を向いて敬禮をされました。すると後ろの方に、今度はアメリカの碇泊してをる軍艦からも同樣の奏樂をもつて敬意をうけたのであります。何百人の在外同胞、眞に私どもの兄弟をこの日本の軍艦の上に集めておいて、外國軍艦から君ヶ代の奏樂をもつて敬意を表せられた時の氣持はどんなものであつたでありませう。こゝに私どもは本當にお互ひは日本人同士である、お互ひ本當の兄弟同士である、といふことが熟々わかるのであります。これも軍艦旗といふものがさうさせてくれるのであります。

あなた方が下さつた軍艦旗が他日かやうな場合にも使へるのでございます、どうぞこのことを御披露申上げて置きます。

次に先ほど私は今帝國の海軍は躍進中だといふことを申上げて置きましたが、この躍進途上において最近一つの悲しむべき事件が起つたのであります。それは水雷艇友鶴の顚覆事件であります。このことはすでに新聞紙上や、ラヂオ放送等によつて詳しく御承知のはずだと思ひますが、

念のためこれまた專門家の私の口から一應お耳に入れて置きたいと存ずるのであります。

一體水雷艇といふものはどういふものであるか——かう申しますと一言にして申せばこれは時代遲れの軍艦なのであります。世界の海軍から忘れかけてをる船なのであります。何故かといへば、この船はもう今日使つてをりませぬ。御承知の通りに今から廿數年前までは盛んに使つてをりましたが、この船は魚形水雷を主用するための軍艦でありまして、多くは夜戰に使ふのであります。帝國海軍は今日まで日清、日露の戰爭その他において、水雷艇を盛んに使つて、さうして大きな手柄を立てた、すなはち水雷艇の手柄話は數限りなくあるのであります。日露戰爭當時までは、すなはち日本海大戰の時までは——。がその後はこの船はだん〳〵要らなくなつた、何故かと申します。より有力な船が出來たために、世界の海軍から水雷艇はいつともなく影を沒し、今日はどこの海軍もほとんど新らしくこれを造つてをりませぬ。かういふものを今ごろになつて日本海軍が何故造らなければならなくなつたか、このことをちよつと說明する必要を認めます。

水雷艇はこれをいひ換へればロンドン條約およびワシントン條約が日本に造らせた、かういつ

てもよからうかと思ふのであります。すなはちこの過去の軍縮條約によつて、御承知の通りにわが海軍は英米のそれに比べて保有兵力量が英米の各々五に對して三でありました。世にいふ「五對三」といふ比率を私どもがまア押つけられたのであります。この三なる比率をもつてしては、新たに附加へられた日本の國際的責任と義務を果すといふことが出來なくなつたのであります。どういふ義務や責任かといへば、これは東洋平和の維持であります。この東洋の平和を維持しなければならぬ責任を私どもは今新に持つやうになつた。どうして持つやうになつたかといへば滿洲事變がさうさせた。滿洲事變と同時にジュネーヴにおいては御承知のやうに各國の反對に遭ひまして、遂に一三對一、四二對一となつてわが全權は引揚げられたのであります。列國と外交的に袂を別つたのであります。更に滿洲國の出現ともに私どもは日滿議定書といふものを作つてさうして國際聯盟を脱退した。この脱退したといふことで、東洋平和を維持するには日本が、獨力をもつてこれに任じなければならぬといふことに自然なつたのであります。少しは言葉に語弊があるかも知れませぬけれどもまアさうもいへると思ふのであります。昔は列國と協調して東洋の平和維持をしようといふ望みを多分に持つてをつたが、今回のこの事件の結果によりまして私

どもは、私どもの考へで獨力をもつて任じなくちやならぬといふことに結局なつたのであります。さうなつて見れば、この三なる比率をもつてしては中々覺束ない、心細いのであります。そこで、どうかしてこの少い數字を補つて、さうしてわが海軍の實力を附加へようぢやないかといふ段になりますと、條約制限外のものに自然手を染るといふことになるのであります。幸ひ六百トン以下の小艦艇は條約制限外でありますから、この種の船を澤山造つて、さうして條約上の三なる數字を補つてやらう、かういふことになつてやつたのが、日本の水雷艇建造であります。

この小さい水雷艇でありますが、私どもが考へて私どもが造つたならば、世界の人が造り得なかつたある、より立派なものを造ることが出來るであらうといふこの一つの自負心があります。日本式に一つ考へて見ようぢやないかといふので、艦政本部や、あるひは技術研究所等においていろ〳〵と理窟を立てまして成案を得て、さうしてこゝに建造命令が發せられたのであります。さて出來上つたこの水雷艇は果して實用に適するや否やといふことで、今度は實驗を經なければならぬのであります。こゝが人間の悲しさと申しませうか、人間が考へたものではありますが直に實用に適するや否やといふことはこれはまだわからぬ、理論と實際とが相まつてはじめて、そ

のものの價値が決まるのであります。水雷艇友鶴も實用的にテストしなければならぬ。そのテストが極めて嚴肅なるシヴィヤなテストであつたのであります。今年三月十二日午前一時からはじまつた夜戰にこれを使つたのであります。夜戰と申しますと、陸上の戰鬪でも一番困難とするものでありますが、況んや海上においての夜戰は至難なことであります。考へてごらんなさい、この暗黑の闇の海上において、皆ごの船も〳〵燈火を管制して、隱蔽して、さうして列を作つて速力をはやめて、面舵、取舵をもつていろ〳〵運動することは、これこそ至難中の至難であります。丁度大阪の立派な街の上を、闇の夜に澤山の自動車がヘッドライトを消して、縱横無盡に駈廻ると同じやうな危險さがあるのであります。この演習をごうしてもしなければならなかつた。しかもこの演習は暴風の中において行はれました。風速廿メートルといふやうな風の中で、以上申上げたやうな暗黑の海面に燈火管制の下に、水雷襲擊の演習が行はれました。そこでこの演習經過中に起つたのが今度の事件であります。不幸にして友鶴が顚覆は致しましたけれども船は出來たてのほや〳〵であります。決して沈みませぬ、防水の設備が完全に行はれて、一つの區劃から次の區劃に水が行かないやうに出來てをります。そこで艦内にあつた空氣のために底を上にし

て浮いてをつたのであります。この艦内にをりました百名許りの人が、五十何時間といふものを限りある空氣を吸うて生存し、しかもこの暗黑の部屋の中で、各々その受持の場所を守つて、最善の努力を拂つて靜かに天命を待つたのでございます。幸ひこの中から十三名の人が救助されました。私どもはこの十三名の生存者の口から、および尊い犧牲になられました人の書殘した、いはゆる遺書といふものを通じて友鶴乘組員の心持を十分知ることが出來たのであります。この友鶴乘組員の心持は、これすなはち全海軍の心持ですから、このことにつきましては諄々しいやうですが遺書を少し讀んで見たいと思ひます。

井上三等主計兵曹の書いたもの、次の通りであります。

一死報國の時、恨むらくは三六年に死なざるを——

一九三六年のことであります。

被服糧食は午前十時までに整理濟み

これは自分の受持分擔の責任觀念であります。

日記は作業事務室に平素の覺悟認めあり　　井上平次

將校の中では古谷といふ機關中尉の認めたもの

天皇陛下萬歲、友鶴萬歲

であります。大島特務少尉

天皇陛下萬歲

大島外五名

われら今喜んで死す、帝國萬歲

大島

一等機關兵國重至正といふものが認めたもの

御國の爲に死す本望也

國重

一等機關兵大野一夫

今母(不明)萬歲

大野

と書いてあります、筆者不明のものですが

三月十二日午前五時　大君の爲、母上、靜江賴む、左樣なら

三等機關兵山田清美の認めたもの

僕は笑つて死んで行きました

この山田三等機關兵は恐らく十臺の青年であらうと思ひます、新兵を卒業して間もないものだらうと思ひます。新しい水雷艇に乘込ませるものは無論志願兵の中から取ります。志願兵といへば徵兵適齡に達せない十臺の有爲な青年から海軍が取ります、これが新兵教程を經て、さうして三等機關兵になつて乘込んだものとすれば十臺の青年であります。その子供、本當の子供らしい書方です、「僕は笑つて死んで行きました、山田」。しかしながらこのことを考へてごらんなさい實に立派なことです、これだけの覺悟をお互がもつてゐるかどうか「僕は笑つて死んで行きました——」と。一等機關兵谷本政次の書いたもの

六時　左樣なら

三等機關兵齋藤道夫

天皇陛下萬歲

一等機關兵金崎國見の書いたもの

萬歲　金崎

田中武雄といふ一等水兵の書いたもの

午前四時半、急に左に傾き顚覆す、極力防水に努む、天皇陛下萬歳　　田中武雄

荻原岩夫一等水兵

日本男子の武士、母安んぜよ、皆喜んで死す、五時半　　荻原

井上平次といふ三等主計兵曹の書いたものがもう一つあります

船と共に四時卅分顚覆す

一區二區居住員を以て極力防水に努むれども浸水徐々にして――

渡邊正といふ二等兵曹の書いたもの

約一時間を經てり、一同元氣にして沈着なり、未だ救助に來れる模樣なし、君に捧ぐ、一同口を揃へて覺悟しをる　　渡邊二等兵曹

少し離れたところで

職責を盡して皇國の繁榮を祈る

とかう認めてあります、また少し離れて同じ人が

潔く死んで行きます

これが時間の經過とともに書いたのであります。

以上の遺書を通じて私かういふことを思はせられます。この人達は皆喜んで死んだ、一人も殘らず喜んで死んでゐる、成佛してゐる、不平不滿もなく、この世に執着なく皆潔く死んでゐる御國の繁榮、天皇陛下の萬歳を最後の一言として死んでをるところを見ると、正しくこの人達は成佛したに違ひございませぬ。私はこの海軍の軍人を問はず、陸軍の軍人、日本の軍人の中には天皇陛下といふ一大中心、心棒になるものを持つてゐるから、私どもはこの最期に直面した場合に喜んであの世に行くことが出來ると思ふのであります。この一大中心がなかつたならば私どもは斯のごとき立派な最期は遂げ得ないと思ひます。この軍人の中心は天皇陛下である、私どもはこの中心から發する靈光に浴して活動し、而して一度やるだけのことをやり終へた時には、喜んでこの中心に沒入するのが私どもであります。皆これらの人が最後の一言は天皇陛下萬歳である天皇陛下の彌榮、この永遠の生命を信じてそこに沒入して行く、だからこの人達は死んでも死んでゐない、生きてをります。お互軍人は皆が皆、宗教家ではありませぬ、南無阿彌陀佛を唱へることは知りませぬが、死ぬ時だけは天皇陛下の萬歳を唱へます。これがお互のたしなみであり、

日本の軍人精神の特色であらうと思ひます。

外國の軍隊にはどうも中心となるものがないやうであります。私も多少は研究しました一人でございますが、外國の軍隊に強ひて中心を求むれば三つあると思ふ。一つは神樣であります、ゴッド。一つは君、キングであります。もう一つは國、カンツリー。このキング、ゴッド、カンツリー、これが外國の軍隊の中心で三者對立せる中心を拵へてもつてをります。然るに日本の軍人の中心はたゞ一つ、總てがこゝに溶合つてをり他の何ものもないのであります。こゝに私どもの特色があると思ふのでございます。

次に私がこの遺書を通じて考へましたことは、人間が死んで行く時にはお母さんといふことを思ひ出す。人間最後の思ひ出では母といふことであるといふことがどうやら私はわかりました。今お聽きになつたこの十數人の遺書の中に、少くとも三人か四人はお母さんと書いてある。天皇陛下のほかにいはないものがお母さんといつてゐる、お父さんとはいはなくつてもお母さんといつてゐる。お母さんを最後の思ひ出として、こゝに安心立命してあの世へお土產にもつて行つてをるやうな氣がするのであります。何故お父さんを思ひ出さぬでお母さんを思ひ出すかといへば、

これはお母さんは絶對の大きな愛をもつてゐる、大愛をもつてゐるがお父さんは理窟の世界である。理窟といふものは死ぬ時の思ひ出にならぬ。しかるに理窟を超越した大慈大悲の持主たるお母さんに對しては思ひ出す、こゝは一つお父さんになるあなた方考へて頂きたい。人の呼吸を引取るときにはどういふ人でも善人になります。それこそ神佛の心になる、その時に母を思ひ出すこれは眞理でなければならぬ、でありますから世の中は理窟ではいかぬ、と私は思ふのであります。人の子として一度親の膝元を立つてから世の中に出る、世の中にはいろ〳〵の浪がある、これに揉みに揉まれるので人の子が失敗することもあります。あるひは心ならず罪を犯すものもありませう。この失敗せる子、罪を犯せる子がどこへ落着きますか。無條件に歸つて來るこころは母の懷ろではないでせうか。母は理窟なしでこれを懷く、理窟なしにその子供を懷ろに入れてくれるのがお母さんですよ。そのお母さんを思ひ出すのであります。死ぬ時にはこの鬼をもひしぐ海軍の軍人も母を思ひ出してをる。こゝはどうぞ考へて下さい。またこゝにも多少御婦人がおみゐになつてをるやうです。あなた方の天職は實に大したものです。どうぞあなた方はあなた方の世界をよく守つて、さうしてます〳〵大慈大悲の愛を人の子の上に注いで頂きたいものと私は思

ふのであります。

序でございますから海軍々人の氣持をもう一つ述べさせて頂きます。

今日の海軍の飛行機は非常に進歩發達を遂げてをります。飛行機そのものについては、まだ外國に對して斷然勝れてをるこは申上げ兼ねますが、飛行術は外國の海軍に敢て劣らないほどの發達を遂げてをるものこ考へてをります。けれども この海軍の飛行術も過去においてはいろ〳〵の出來事があります。今を去る四年前、昭和四年四月廿日の海軍大演習の際に起つた事件であります。こころは朝鮮海峽でありました。この折に航空母艦から飛行機を俄に出して、敵情の偵察をしなければならぬここになつて、十五機の飛行機が翼を揃へて出て行きました。この十五機の飛行機は敵情偵察こ、運よくば敵艦を爆撃するだけの任務をもつてをつた。航空母艦の甲板から飛出すこころの飛行機は、陸上の飛行機こ同樣に車輪をもつてをるのであります。この車輪をつけてをる飛行機は一度海上に達着致しますこ、そのまゝぶるつこ沈んでしまひます、沈めば操縱者も同時に最期を遂げなければなりませぬ。海軍の飛行機は、艦上飛行機こ水上飛行機の兩方あります、艦上飛行機が今申す危險極まるものであります。水上飛行機はフロートこいふものをもつ

てをりますから水の上に着水するのでありますが、唯今申しました航空母艦の甲板から飛出したものは陸上飛行機こ同じものであります。これが天候俄に變りまして、それこそ風速が激しく雷雨を伴つた險惡な天候こなつたのでありまして、航空母艦は非常に心配致しました。この出しました飛行機を收容するこがむつかしくなつたのであります。この飛行機は航空母艦のすなはち子供であります、航空母艦はお母さんである。お母さんこ子供の間は、どうして連結をこつてをるかこいへば無線電信をもつてやつてをる、海上のここでありますから陸上こ違つて地物によつて自分の位置をはつきりするここはむつかしい、互ひに、どこに自分が飛んでをるかその位置を確かにするここが出來ないのであります。況んや天候が暴風雨の間にあつては、親船の場所も子のをる場所もはつきりしないのであります。しかしながら無線電信により十五機が空中に飛んでゐるこいふここはわかつた、子は安全であるここはわかつたが位置がわからぬのであります。歸つて來ようこいつても親船のこころがわからぬ、こゝに非常な煩悶があつたのであります。やがて六機の飛行機が歸つて來た、續いて二機も歸つて來たけれども まだあこ六機は歸つて來ませぬ。さうしてをるうちに飛行機から無線電信が來ました。その電信たるや燃料あこ廿分、あこ十五分

あと十分、五分――自分達の搭載してゐるガソリンがあと五分といつて來た。この電信を受取つた航空母艦の艦長以下皆の心持はどんなであつたでせう。それでもこれを見殺しにしなければならなかつた、如何にしても人力のおよぶところではない、かゝるうちに夜の帳が海面を包んで眞暗になつた。その晩お母さん船は血眼になつて附近を捜したが、遂に子供の行方はわからなかつた。ところが翌朝天明になつて、濟州島方面から良いニュースが來た。それは四機が濟州島の近所に着水して、運良く丁度附近を通つてをつたトロール漁船に救助されたといふ知らせであります。けれどもあとの二機は遂に不明。それから一ケ月を經過致しまして、日本海の鬱陵島の附近におきまして二人の死體が一緒にあがつたさうです。この二人の死骸はバンドをもつて互ひに結りつけて離れないやうにしてあつた、收容されたのが渡邊少佐と小島大尉の二人です。だん〳〵研究調査の結果によると、渡邊少佐が遂に燃料盡きて日暮ごろに海面に降りて、機體は直に沈沒し自分が泳いでゐるところへ續いて小島大尉も同じところに降りて泳いだ、ところで小島大尉は二人同じところに勤務してをりまするもので渡邊少佐が泳ぎが餘り上手でないことを知つてゐる自分は泳ぎが達者だ、そこで自分の水泳術によつて友人の生命を少しでも永らへてやらうといふ

友情の發露から、渡邊少佐のところに泳いで行つて自分のバンドをもつて結びつけて離れないやうにした。これが最後まで死なば諸共一ケ月後までも離れず一緒になつてをつたわけでございます。次に渡邊少佐のポケットから一通の遺書が出て來た、それは鉛筆で書いた走り書で、飛行機の着水前空中に飛んでゐる時、自分の運命を知つて僅か數秒の間に書いたものらしい。手帖の第一ページに「天皇陛下萬歳」第二ページには「清く暮せ」とあつた、定めし奥さんに宛てたものであらう、これが認めてあつたさうです。かういふのがわれ〳〵海軍軍人の氣持であります。

次に潜水艦ですが、今日のわが潜水艦は中々大したものであります。帝國海軍がもつてゐる潜水艦の兵力量は外國がびつくりしてをるほどで、すなはち外國の中でもイギリス、アメリカは目の上の瘤として、何んとかして日本から潜水艦の兵力を取去つてしまはうと考へてゐるらしい。よつて從來の國際會議におきましては度々潜水艦全廢論を唱へてをります。これに對して反對してをるのが日本とフランスあたりです。かやうにも進歩發達を遂げたこの潜水艦も、過去においては御承知の通り、第六號潜水艇が佐久間艇長以下十六人乘つて、廣島灣内において沈沒したまま、浮いて來なかつた悲しむべき歴史をもつてをります。次には四十三潜水艦が演習の際、これ

また友鶴の今回の遭難と同じ場所においてほかの船と衝突、沈没したまゝ浮いて來なかつたのであります。この四十三なごは頗る悲慘なものでありました、何故かといへば、沈没位置はわかつてゐる、その位置の上に救助船が行つて、急速に引揚げようと百方手を盡しましたけれども、如何せん水深深く潮流激しくてどうしてもこの大きな重量物を揚げることが出來なかつたのであります。そのうちに潜水艦と、上にをる救助船との間に電話が取着けられ、話が出來、艦内の狀況は手に取るやうに上にわかる、しかも最後にはこの人達の遺言を電話で言つて書くといふのであります。この電話についた當時の防備隊司令以下の心持はどんなであつたでせう。これまた遂に見殺しにしなければならなかつたが、一人として女々しいことをいつたものはない、皆、天皇陛下萬歳を唱へこの潜水艦の大切なことをいつて、われ〳〵の失敗によつて後進の海軍の人達が士氣を沮喪してはいけない、潜水艦こそわが日本人の寶だからます〳〵發達をさせなければならぬといつて、上にをるわれ〳〵を激勵してくれたのである。これによつて日本海軍の將卒の士氣は一層緊張し、わが海軍は技術においても精神においても、だん〳〵と蘇返つたのであります。

以上申上げたやうなものが私達の海軍々人の心持であります。この心持をもつてゐる幾萬の將

卒は、今や非常時局を迎へて、眞に生命を打込んでの訓練教育を施されつゝあります。必ずや短時日の間に、更らに一層の進歩發達を遂げ、實力を着けることを信じて疑ひません。

最後に私はこゝに罷り出ました序をもちまして、將來あり得べきこの國際問題の一として、南洋委任統治を聯盟に返へせとか、なんとかいふ、かういふ場合に、私どもはこれを斷乎として刎ねつけなければなりませぬが、それに對して南洋の重大性を、まづもつて皆さんが認識されてゐることが必要だと考へまして、極く簡單にそれを御説明致して見たいと思ひます。南洋の國防的重大性を申します前に、日本本國の防衛といふことにつきまして、私の所見を申上げて見たいと思ひます。これは私個人の所見であります、決して海軍の所見ではないのでありますが、私の所見が何らかあなた方のお役に立つやうなことがありましたならば、私としては仕合せの至りであります。

日本の本國の大切なことはこれは申すまでもない、すなはちこゝは、この神聖なる萬世一系の皇統おはしますところであります。歴代の天皇の御陵のあるところであります。そして私どもの先祖代々の墓のあるところ、しかしてわれ〳〵が家族生活をこの國土に營んでをるのであります

から、これが何よりも大切なものであります。何ものにもこの國土は代へ難い大切さをもつてをる。これをどうして護るかといふことは、一人殘らず八千萬國民の考へて置かなければならぬことゝ思ひます。これについて區々の所見があつてはいけないかと私は思ふのであります。どうして護るか、今日はスピード時代、飛行機の時代、その飛行機も速力が早い、軍艦も鐵道も速力の早い時代であります。その時代においてこの日本をどうして護るかといふことですから、ちよつと難問題です。しかしながら、かうお考へになつたら良からうかと思ひます。日本がもし間違つて海國にあらずして陸國である、すなはち四面陸をもつてしてをるところの陸國日本であつたならば、その陸國日本の國防の第一線はまさしく國境だらうと私は思ひます。國の境にやはり鐵條網、塹壕を設けて護り、それから國内に第一線、第二線の防禦陣地を作らなければならぬと思ひます。國境を越ねてよその國に國防線を張出すことは、國際公法がこれを許しませぬ。もし左樣な事でもすれば、列國は侵略呼はりを致します、況んや隣りが敵國なるにおいてをやです。國境を第一線とするに違ひない。ところが日本は陸國にあらず海國であります。だから海の方に國防線を當然張出さなければならぬ、押出すやうに神樣も仕向けて下さつたのだから張出さなければ

天罰が當ると思ひます。海の上にいくらでも張出せるのでその方から考へますと、日本の國土防衛といふものは、この海岸線で圍まれたちつぽけな島國ではないといふことがいへます、幾らでも海上に防禦的國土は廣がつてゐるのであります。北の方は日本海を越ねて大陸世界に接してをるかも知れませぬ、東の方はどこかの大きな國と接し赤道を通つて妙なところと繋がつてゐる國家であるかも知れませぬ、廣いその中間においては、塹壕、要塞、鐵條網、いろんな障碍物がある、この障碍物の作用によつて、この眞中の本國には何等の傷が付かないやうにしなければならぬ、この本國をいつまでも無傷のまゝに置かなくてはならぬのであります。いつもこの中間には廣いところの海面の障碍物があるのであります。私どもは三千年の間、未だ曾て敵兵をしてこの神聖なる國土に上陸せしめなかつた誇るべき歴史をもつてをるではないか。これは子々孫々に傳へなければならぬ。もし今日これを放擲して、國土に汚點を印されるやうなことがあつてはならぬと思ひます。すなはちいひ換へれば、敵を近寄らせてはならぬといふことに、お互ひ全力を集中しなければならぬと思ふのであります。すなはち國外において、遠いところで防ぎ止めるのであります。わが國の國土防衛には外線防禦と内線防禦とありますが、外の防禦に重きを置いて内

を第二次に考ふべきであらうと思ひます。その本來を取違へて、内の方に全力を注いで外を疎かにすれば、日本は自滅のほかはないと私は考へます。たれしもお互ひ個人でも國家でも長所と短所はもつてをります、誰しも長所ばかりでなく短所もある。個人のお互ひはどうしてこの自分の身體を護るかといへば、手や足の作用により敵を近づかせないやうにする、この身體に危害を加へようとすれば手が働き拳固を作つて毆り、足で蹴る、さうして近寄らせぬやうにするといふのが一身防護の術であります。それと同じやうに、國家も自分の國家國土に直接敵が來るやうなことがあつてはならぬ。どうしてもより遠いところで、手足を使つてこれを打拂はなければならぬのであります。ところが、日本にはちやんと長い手足が出來てをるのであります、神樣が着けて下さつたのであります。また私どもの先祖、先輩が幾多の國難を嘗めまして、やうやく長い手足を作つたのであります。今日は澤山の手足があります。日本といふものは千手觀音樣見たいなものであります。さうしてその千手觀音樣の教へてくれました戰法を使へばよいのであります。どういふ手があるかといへば、まづ地圖でごらんなさい、北の方には千島列島といふ長い手があり根室、シムス島まで、東北の方は七百マイルといふ長い手が延びてをる。それから今度は眞北の

方にカラフトといふ五百マイルの手が延びてをる。更に一方には日本の本土の眞中から南の方に赤道を通じて南方列島線といふものが延びてをる。それは富士火山脈で、伊豆半島から海中に飛び出したところの大島三原山、伊豆七島となり、青ケ島、小笠原列島から硫黄列島、マリアナ群島からカロリン群島、それから赤道まで行つてをる、千八百マイルの手が延びてをるのであります恐ろしい長い手です、この手は・・・。それから西南の方には琉球から臺灣に至る長い手があり、これも八百マイルからあります。次には大陸方面には朝鮮、滿洲といふ長い手があり、神功皇后樣以來、いろ〳〵私どもの先祖先輩が血を流して作つて下さつた長い手であります。かういふ澤山の手や足を活用させてこそ、日本の本土は萬々歳、いつの世までも變らずに神聖金甌無缺の國となれるのであります。この手足を遊ばせてはならん、この活用こそ私ども國防の第一と考へる。この各〻の手や足が、それこそ國防生命線であるのであります。どうしてこの手足を使ふかといへば田村麿が教へてくれた手であります。今日は盛んに手足から飛行機を使ふ、手足と手足の間は日本の海軍を使ふ、海軍といふものは先きもいつたやうに、移動の兵力である、轉々として晝夜動いてをるのであります。この大きな兵力があるから空間々々にこの日本海軍の兵力を使ふ、

すなはち制海權といふものが確保されました時には日本の周圍が悉くこの要塞である、長い手であり足である、かうなるのであります。

ところでこれは海軍だけではいけませぬ。やはりあの滿洲といふ大きなところ、日本を遙かに距たつてゐるあの大陸は、わが帝國の大陸軍の實力があつて、これが防禦陣地となり日本國防の生命線となつてゐるのであります。こゝにおいて日本本國を衛るものは單り海軍にあらず、陸海軍が車の兩輪のごとく鳥の兩翼のごとくなつてその作用を全くせなければならぬのであります。無論生命線といふものは日本の本國と遙か距つてをる重要なる要地である、すなはち土地といふことにおいてその意義をもつのでありますから、ごうかしつかり認識をして頂きたいのであります。日本には澤山の生命線があるがこの生命線も疎かにはなりませぬ。この生命線を私どもがよく認識して、この眞中において日本の海軍の實力を充滿させ、また出先きにおいてわが陸軍の力を活用した時、日本國は萬々歳で金甌無缺、國の威信を尊重保持することが出來るのであります。大阪の敵を防ぐは大阪においてするにあらず、遙遠いところでやるといふのが國防の本義でなくてはならぬと思ふ、大阪の頭の上に來た時はもうそれは末の末です、さやうなことがあつてはな

らぬのです。私はさう思ふ、さやうなことがあつてはならぬ、だからもつと前に盡すべき手段は盡さなければならぬ、もし最惡の場合が來た時にはあなた方一生懸命になつて下さい、これは平常から稽古して置く要があります。中々一朝一夕ではこの防禦演習は訓練出來ないから、常からこれは稽古に稽古して置く必要があるが、たゞこれに沒頭して、出先きにおいて叩くことを忘れたら遂に私どもは自滅するのであります。無論出先きにおいて叩きますことは、陸軍なり海軍當局者がやりますが、今は國民國防の時である、國民全體が眞劍になつて陸海軍を督勵して下さらなければならぬ。この本末を取違へられて、末の方に力をお入れになつた時には私は少し心細いと思ふのであります。私は今、日本の國土防衛についての私の所見を述べてをります。誤解をされてはいけない、都市防空が不必要といふやうなことは毛頭いつてをりませぬから、よく御承知置きを願つて置きます。

内線防禦も外線防禦も何れも大切でありますが、日本は神代の昔からこの手足を長くして、さうして遠いところで處理をして、この國土には來ないやうにしなければならぬといふことを教へられてをります。この事實の前には如何ともすることは出來ぬと思ふのであります。今のやうな

考への下に、滿洲といふものこそ帝國の大陸における國防生命線であります。滿洲がまさに帝國の大陸にもつところの陸正面における生命線であるのと同じやうに、南洋群島も南方海正面におけるところの生命線の一つであります。滿洲をわれ〳〵が手離すことが出來ぬがごとく南洋も手離せぬのであります。手や足を斷ち切られて完全に生命を保つことが出來ませうか、それも考へなければなりませぬ。もう少し、この富士火山脈と南方列島線と、それから南洋委任統治の地域をどう使ふかといふことを詳しく申上げたいのでありますが、それを話しますと帝國海軍の手がわかります、手がわかつてはお國のためにならぬので、今日はこれは遠慮致しまするから聽きたい方はそつと私のところへ來て下さい。

次に海軍がやつてをります事柄の中で大演習の話を少し致します。大演習といふものは陸軍では毎年ございますが、海軍は、今日までは三年に一度あることになつてをります。何故かといへば、一度やるのに五百萬圓くらゐの大金がかゝる。この大金は貧乏な日本としては背負ひ切れない。そこで三年に一度といふことに從來なつてをつたが、時は非常時の今日、そんなことはいつてをれない、軍令部、海軍大學校でいろ〳〵研究され、この戰時の計畫はやはり實地やつて見なければ安心が出來ないのであります。先程もいつたやうに理窟だけではいけない、そこで昨年やられたのであります。昨年やられて今年もやるのであります。續いて今年も五百萬圓、今回の議會に豫算を要求しましたところが、あなた方のお選び下すつた代議士諸君がよくわかつてくれて協贊してくれたのであります、氣持よく出して下さつたのであります。私ども感謝してをります また來年もお願ひするかも知れませぬからその時分には宜しくお願ひ致します。非常時の續きます限り五百萬圓を毎年お願ひするかも知れません。さて昨年の大演習は御承知の通りに六、七、八の三ヶ月の長きにわたつて、太平洋の廣いところを舞臺として、日本の全海軍が擧つて參加したのであります。その場所がどこであるかといふことは、私はいふことを禁ぜられてをりますから申上げ兼ねますが、大體皆さん御想像されてゐるところに違ひないのであります、まアそこでやつたのです——。ところが非常な收穫がありました、やはりやつて見るに限るのであります。昨年はあの手でやつた、今年はこの手でやらうといふのであります。演習も三ヶ月やれば大概面白いのです、一週間二週間と違つて三月間碌に上陸しないで、夜を日に次でやつてをります。海軍の苦勞もお考へを願ひたい。時も七月八月にかけて、場所もどうやら暑いところのやうであり

ますからなみ大抵ではございませぬ。それでもたれ一人文句をいつたり不平不滿なものはございませぬ、皆喜んでやつてをります。大演習の第三期演習と申しますと對抗演習でありますが、この折には、畏くも大元帥陛下がおでましになつて、兩軍を御統監あそばすのであります。私は幸ひにしてこの第三期演習を陪觀するの光榮に浴した一人であります。こゝに御列席の原少將などは演習部隊の一司令官として某地にをられた方で、また今後折があつたらばよく同官から承はられる方がよからうと思ひます。

私どもの見ました一場面を御紹介致しませう。演習の經過は無論話すことは出來ませぬが最後に私が見ました場面であります。これは感激の場面でありますから申上げる方がよからうかと思ひまして以下簡單に御紹介致します。

八月の中ごろでありました。私は赤軍艦隊の主力の一艦に乘組んでをりましたが、ある朝、私は日出前に艦橋にあつてあたりを見てをつたところ、私の眼鏡に御召艦らしい姿を發見致しました。どん〳〵お天道さまが水平線に差し昇つて來ますと、あたりが明るくなりこの御召艦の艦影が明かに認められました。やがて御召艦とこの赤軍は接近を致しまして、さうして旭日の下に、

天皇旗がマスト・ヘッドにひらめいてをりますのを、はつきり拜むことが出來るやうになりましたので、私どもは皆期せずしてそちらの方に向つて最大の敬意を表したのであります。頭を下げて敬禮を致しますと、われも、人も、なんだか妙な氣持になつて涙が出るのであります。一種いふべからざる感じが、胸の底から湧いて來て涙が出るのは事實であります。これは日本人として共通の心持でありませう。昔西行法師が、伊勢大廟にお參りになつて歌はれた歌の中に「何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」といふのがございます、このやうな氣持であらうと思ひます。今、旭日の映ゆる太平洋の眞中において、一天萬乘の君をひよつこり拜み奉るその瞬間、私どもの氣持、日本人共通の氣持はすなはちこの涙であります。その時はもう相當に赤青兩軍は接近してをつたやうであります。數百マイルを距てゝをりまして警戒をさをさ怠りなく、この赤軍においても澤山の船が燈火管制を致しました。燈火を隱蔽して漏れないやうにし、眞暗な狀態において、何十隻の船が相當速力を早めて、時々舵をこつては動きます。この運動は相當むつかしい、むつかしいけれどもそこは慣れたものです、何等の不安もなく、暑い時に、暑いところで燈火管制、すなはち窓を閉めて置くので室内は無論非常に暑いのでありま

す。この燈火管制は御召艦といへどもやつてゐないでになる、陛下御坐乗の御召艦もやはり窓を閉めて燈火を消してゐないでになる、室内の温度も恐らく百度に達してをるだらうと思はれるのであります。私は、陛下の御動靜について洩れ承はつたことがある、その一端を御紹介致しますと戰況がだん〳〵迫るに從つて、陛下は御軍服もお脱ぎにならず、全くベッドの上にもお憩みにならなかつたさうであります。またこの戰況を聞し召すために幾度となく、暗い甲板の上をブリッヂまで往復あそばされたさうであります。なほまた暑い時ですから船ではこの水兵達が風呂をたてゝ差上げましたけれども、一度もお入りにならない、風呂はたて損だつたさうです。定めし潜水艦、驅逐艦の乘員の上を御軫念あそばされての大御心であらうと拜察するのであります。なほまた船においては長い航海の御徒然を慰め奉るため、デッキ・ゴルフの運動用具を新しく作つて差上げて置いたけれども、さやうなものには一度も御手をお觸れにならなかつた、最後に演習中止を御命令になつた翌朝、はじめてこのゴルフ運動をおやりになつたさうです。この御精勵の陛下を中心に、幾萬の將卒が御國を護らんがために一生懸命になつてゐる、この演習が緊張するのは當り前であります、緊張するために故障といふものは餘り起りませぬでした。二百隻近くの

艦船が敵味方に別れ、あらゆる戰術、戰略の運動を致しましても故障が大して起らぬのであります。飛行機などもそれこそ百何十、二百臺に近いものが晝夜飛んでをりますけれども、人命の損失といふものはなかつたのであります。非常に猛烈な運動はしますけれどもそこが張り切つてをる、先ほど申しました通り、幾萬の將卒が皆自覺して一心同體となればかういふことになるのであります。人間の眞面目な心の境地から生み出す成績といふものは、偉大なるものでなければならぬといふ教訓を、私はうけ取つたのであります。演習は最後の夜襲の場面を殘して終結となりました。演習が中止になりまして、赤青兩軍が東京灣の觀艦式場に向つて歸ることになりました私ども赤軍は東の方、青軍艦隊が西の方に遠に距てゝをりましたが、御召艦をその中に置いて北の方、日本を指して幾晝夜走りました、兩軍單縱陣を作つて——。さうして私は忘れも致しませぬが、その朝などは極めて穏かな日でありました、風もなく一天晴れわたつた天皇日和、紫色の海水の上をこの大艦隊が、各連繫をとつて日本の方に引揚げつゝある光景を見ました時の私どもの心は、やはりこれまた涙であります。涙が自然に出る、海國日本のもつ寶の總てはこれでなくちやあならぬ、これこそ寶であると思はざるを得なかつたのであります。かやうな極めて

良い氣持で走つて、さうして幾晝夜の後日本に迎り着きました。さうして觀艦式を迎へたのであります。今年はどこで大演習がございますか存じませぬが、また今年も情況が許せば私は拜觀に行きたいと思つてをります。

今回の滿洲事變におきまして、わが陸軍の赫々たる武勳につきましては今更、私が申上げるまでもなく國民の全體はおろか、外國もひとしく認めるところでありますけれども、帝國海軍のやつた事柄につきましては、今日は皆さん既に御承知でもございませうが、はじめのうちは大分認識不足なところがあつたのでございます。陸軍の滿洲における華やかなる舞臺に比べまして、海軍は極めて地味でありました、いひ換へれば緣の下の力持ちのやうな仕事をやつたのであります。それでも私どもは滿足して喜んでをりました。すなはち御承知の通りに今回の滿洲事變そのものに對して、日本の行動を侵略的なりといつて、私どもをいぢめましたのは聯盟諸國であります。米國のごときは聯盟の圈外に立つてジュネーヴの會合の空氣をわが國に對して、まア好ましからざる空氣を作つたものとして私どもは考へてをります。次には直接アメリカの國務省から、わが外務省に宛て、幾度か抗議が來たことも記憶してをります。錦州爆擊の當時のごとき、更に昭和

七年一月七日のごとき、相當力强い抗議であつたやうであります。けれども如何に强いことをアメリカがいつても實力が動いて來ませぬでした。これは結構なことです、甚だ良かつたのです、本來ならば、もう最後的通牒にひとしいやうなものには、何ものか實力が轉がつて來るのが當り前ですけれども、これが來なかつた、これは非常に良いことですよ。何故來なかつたかと申しますと、そこがこの太平洋に默々として存在する帝國海軍の實力ではなからうか、わが海軍は御承知の通りロンドン條約、ワシントン條約などで五—三といふやうな比率の下に置かれて、さうしてこの國際情勢を如何せんといつて奮發した。歷代の海軍の人達が一生懸命になつて、さうして國防方針を立てゝない金を頂戴して營々として築きあげたのが今日の海軍であります。いはゞ三なる條約上の權利を早目に行使したのであります。殊にその內容としては今日まで出來た陸奧、長門といふ世界未曾有の戰艦、古鷹、青葉、衣笠あるひは那智、妙高、足柄のごとき、その他、大型驅逐艦、潛水艦、算へ來れば日本式の勝れた軍艦が數年のうちに澤山出來まして、さうしてこゝに日本海軍の實力として世界から尊敬をうけるやうになつた、いひ換へればある一つの纒つた勢力を築きあげることが出來たのであります。すなはち有力なる海軍が出來たのであります。

日本式海軍建設に私どもは成功致しました、その時に圖らずも昭和六年九月十八日柳條溝において鐵道線路が爆破したのであります。私ども海軍としてはその時、この纒つた勢力をもつてをつたのであります、それが天佑といはずして何んぞやといひたいのであります。この纒つた力が、太平洋に默つてをつたのが作用して睨みが利いたのであります。私は、これは海軍が腹藝をしたといつて良いと思ふ。腹藝といふものはむつかしいものである、今後も腹藝をしなければならぬこの睨みがいつまでも利くやうにしてこそ、帝國の國策は平和のうちに遂行が出來ます。これに越したことはない、戰爭などはなるべく避けたいのであります。さやうなことがあつてはならぬ、ならぬやうにするには當然腹藝で睨みを利かさなければなりませぬ。ところが御承知のごとく、今回の滿洲事變がはじまつて米國のごときは何回、日本に抗議を申込んでも日本がこれを受つけない、さういふためかどうか知らぬが、このごろになつて俄かに海軍の建設を思ひ立つて、御承知の通り三年計畫として卅二隻の艦船を澤山な金を使つて造らうといふ、すでに實行案が成つて着々實行されてをります。次にはヴインソン案として百二隻の艦船を五ヶ年で造らうとしてこれまた大統領がサインしてをります。飛行機も千臺近く、この上造らうといふのでやつてをり

ます。一九三九年、今から五年くらゐ後には多分、百卅四隻の軍艦と、千臺くらゐの新らしい飛行機との勢力を、米國は加へるといふことになるのであります。かやうに急速に增大した時、わが日本海軍が、元の通りの勢力であればこの睨みが利かない、腹藝が出來ないのであります。然らば太平洋は平和ではない、そこでこつちもこれに應じて相當のものを準備しなければならぬといふので、今回新たな第二補充計畫といふものが議會を通つて、皆さんの選出された代議士諸君によつて協贊され、今これを實行しつゝあるのであります。しかしこの第二補充計畫は、一九三六年ごろの末になりましたならば、相當ものをいひ得ると思ふのであります。結局もし萬が一、不幸なことがありました場合にもどうやら相撲がとれさうな氣がするのであります。相撲さへとれゝば、あとの四十八手の裏表は、海軍にお委せになつて良からうと思ひます。どうか相撲がとれるやうに今後もして頂きたい。相手方の出やうによつてこちらもやるが、相手が大關であつてこちらが褌かつぎでは相撲にはなりません、相撲にならなければどうにもならない、勸進元が取組ませてくれません。相手が大關でこちらが前頭くらゐにならなければ相撲が出來ません、取組みさへすればあとはうまくやりますからこれを取組ませて下さるといふのが、國民の義務と私

は考へます。これだけは世界列國海軍の情勢に應じてわが海軍が將來また、何んとか一考策なくちやならぬと思ひますから今日からお願ひして置きます。

しかし帝國海軍の眞の使命は太平洋における平和の維持であります。太平洋における平和の維持は、即ち東洋の、アジア大陸の平和維持に寄與することになります。大洋と大陸とは裏と表であつて、これは離すべきものではございませぬ。こゝに日本の陸軍と海軍あり、しかしてその後ろには、この忠勇なるこころの皆さん國民がおいでになる、この三者一體となりて進むこころに平和のうちに國策遂行が出來ると考へるのであります。それを致しまする原動力なるものは、總て日本式でなければならぬのであります。相手は西洋式だ、こつちは日本式で行くんだ、われわれ先祖傳來もつてゐるこの傳統的長所美點を延ばして行つてこそ戰爭が出來る、すなはち寡をもつて衆を破ることが出來るのであります。

この非常時に遭遇して、私は特に私ども日本人たることを自覺し、さうして軍部といはず國民といはず、手を携へてこの日本精神宣揚に全力を盡さなければならぬことを、特に感ずるものであります。長い間御清聽を頂きまして感謝致します。

三六年の危機に對するわが海軍の覺悟

艦政本部造船造兵監督長　海軍少將　原　五郎

私が只今御紹介を蒙りました原であります。海軍に入りましてから、潛水艦と飛行機を主としてやつてをりました。只今も武富大佐の話を、この樂屋の裏であぐらをかきながら聞いてをりました野人であります。したがつて、戰ひは好きではありますが話は下手であります。そのかつもりでどうぞお聽きを願ひます。

只今この裏で聞いてをりましたところ、昭和四年の飛行機の遭難の話がありました。その遭難の時の航空母艦の艦長は、此の私でございます。有爲の青年をむざ〳〵平時において殺しましたことは、誠に私艦長として申譯がございません。この點は深く國民に御詫び致します。たゞ一言言譯ではございますが、かね〳〵航空母艦の艦長と致しまして、自分が部下の飛行將校達に申してをつたことがございます、それは、戰があれば俺は艦長だからして、母艦の艦橋の上でへんほ

んこ飜へる彼の輝ける軍艦旗の下に死ぬことが出來る、しかしか前達は飛行機に乘つて空に飛ぶんだ、航空母艦から離れるんだ、そして命を捨てなければならぬ、であるから、せめて海軍軍人の本分である軍艦旗の下に死ぬようにといひまして、常に飛行機を飛ばします時には、飛行機の中に軍艦旗を一旒づゝ積ませておきました。彼の殉職致しました者は、その軍艦旗を抱いて皆死んだのであります。この點、さぞ本人等も本望に思つてなくなつたものと思ひます。これを以てお詫にかへます。

實は本日私が申上げようと思ひましたことは、今武富大佐が皆話してしまひました。別にもう申上げることはないのであります。若し强ひて言ふならば、現今の日本には非常時とか申して滿洲問題、軍縮問題、その他いろ〳〵な問題があります。即ち國威が盛んになれば、障碍物は增加します。これは當然であります。しかし世間は眼明千人、盲目千人——外國は即ち盲目千人であります。目下はその盲目をどうしたらいゝかといふ問題なのだらうと思ひます。問題は簡單であります。まづ盲目の手を引張つてやることが第一。第二は、それでも動かなければ毆るぞといへば動いて來ます。それでも動かなければ、こつんといへばいゝのであります。問題はこの三つでご

ざいます。頗る簡單でございます。この手を引張つてやるといふことは、即ち東洋の問題については、東洋の平和を維持して各國をリードすることであります。毆るぞといふのは、即ち國民が緊張して何時でもやつて來いといふことであります。こつんといふのは、これは問題でありません戰さするんです。しかしこれは最後の手段であります。毆るぞといへば大抵動いて參るだらうと思ひます。わが海軍は彼のワシントン軍縮會議によりまして、よく言へば——よく言ふか惡く言ふか知らんが右の頰を毆られたのであります。即ち英米が五で、日本は三、然るにロンドン會議で巡洋艦、補助艦もやはり日本は三、左の頰ぺたをまた毆られたのであります。そしてその比率條約をもつて、これから未來永劫に行かうといふのである。即ち右を毆られ左を毆られて頭を押へられたのであります。これだけの屈辱を我々日本人として忍び得るかといふのであります。これは諸君も御同感ではないかと思ふ。彼のイエス・キリストが聖書にかういふことを書いてあります。汝の右の頰を打たるれば左の頰を出せ、しかし左の頰を打たれたらどうするかといふことは書いてないのであります。イエス・キリストはさういふやうなことを毛頭考へてゐなかつた、また當時それを聞いてゐた弟子もまさか左の頰までは打たれまいと思つてゐた。ところがそれが

現實に今打たれたのであります、もう問題はないのであります。

抑も軍縮會議はどうすればいゝかと申しますと、この軍縮といふものをやるには三つの條件が必要であります。第一は國民の國防の安全感、これを確りと持つこと。第二が經費の節約であります。第三に初めて列國との協調であります。この順序を間違へることんでもない事になるのであります。恐らく軍縮をやつた各國も、この三つの順序を間違へずにやつたんだらうと思ひます。一體外國人といふものはどうも自分だけが偉いと思つてゐる人間であります。私は英國に長らくをりましたが、相當に教育のあるものが何といつて聞くかといふと、一番最初に「お前は支那を通つて來たか、インドを通つて來たか」といひます。これ位物事を知らないのであります。それから少し氣の利いたものになりますと「お前この頃苦しいだらう」といふ。こつちは食物が違つて苦しいだらうと言つてるのかと思ひますと、豈はからんや「お前は近ごろ靴をはいてるんで苦しいだらう」といふんです。苟くも日本の軍人をエチオピアの兵隊か何かに思つてるのは怪しからん話、それからもう少し高等な家庭に行きますと、英國は御承知の通り保守主義の國であります。いゝ晩餐なんかの時には電氣がついて、それの外、飾りに蠟燭を置きそれに火を點じて

食事を致します。一寸古風なものであります。さういふ時にこつちはもう百も承知なんですが「これ〳〵どうだ、久し振でお前の國へ歸つたような氣がするだらう」といふ。日本には電氣がないと思つてをります。その位しか日本といふもの、理解がないのであります。日本といふ國を知らないのであります。さういふものを相手にして議論をするのですからなか〳〵難しいのであります。その軍縮會議の改訂が、即ち來年であります。西洋流にいひますと一九三五年、所謂昭和十年、この昭和十年が即ち私は非常時であらうと思ひます。以前この公會堂で、本多熊太郎氏が非常時といふ題について演說をされました。實はそれを隅の方で聞いてをつたのでありますが、どういふことを言はれたかといふと、即ち國際聯盟から名實ともに脫退することが一つ、滿洲問題が一つ、南洋の委任統治問題が一つ、それに今一つは軍縮會議の改訂、この四つを言はれました。私は四つぢやなく八つだらうと思ひます。私が軍人の立場から申しますと來年がこの軍縮條約によつて、日本の海軍が一番比率が惡くなる時であります。所謂五・五・三の三に達する時が來年であります。米國の海軍擴張の完成が來年であります、支那が空軍を擴張して完成するのは來年であります、英國の海軍が軍備を完成するのは來年であります、我々海軍軍人の立場から考

へますと八つだらうと思ひます。お互ひに油斷をしてはならぬ秋だらうと思ひます。この軍縮會議といふものはどうして起つたかと申しますと、その重なることは太平洋問題であります。この太平洋問題とは何かと申しますと、太平洋の權力は昔はオランダ、ポルトガル、スペインが持つてゐたのであります。それを英國が入つて來て彼等を驅逐し、佛國が入りドイツが入り米國が入つて來た。日本は、日清戰爭以來この問題に參加したのであります。そして英米はまづ、彼の歐洲戰爭によりましてドイツを太平洋から驅逐したのであります。次に彼等が利益を得んがためにはこの日本を驅逐しなければならぬ、日本を驅逐するのには、まづ日本の海軍を制限しなければならぬ。といふのが軍縮會議の眞目的であります。

この來年の軍縮會議改訂の具體案に關しましては私は只今こゝに發表するの自由を得ません。無論知つてをりますがこれは結局どうすればいゝのかといひますと、日本は現在の條約に滿足しないのであります。自由の立場に還つて公正なる主張をするのだ、國防の安全感を關係國と均等に確保するといふことを絶對要件とするのだ、これだけであります。この國防の安全感といふのはどういふものかと申しますと、從來の戰史を繙いて見ますと比率が六割乃至八割の海軍は相手

の海軍と戰つて大敗してをります。目下日本はこの六割であります。戰史の上から行けば勝味がないのであります。然らば諸君は「現在の海軍で一體貴樣ら勝てるのか」といふお考へが起るだらうと思ひます、が、この點はどうぞ御心配ないように願ひます、石にかじりついても勝つて死を以て國家を守る信念を持つて居ります、何うかして勝ちたいものだと訓練して居ます、どうぞ御安心なすつて下さい。尤もそれには從來の軍艦を改造したり、最新の兵器を澤山供給してもらはなければならぬ。しかし、さういふ不安な考へを少しでも國民が持つといふことは國民が引込思案になります。それが延いて商業、工業、その他いろ〳〵な方面に影響します。即ち國防の安全感がそこで缺けるので、延いて國運の隆盛を妨げるのであります。

次に、或は次回の會議の結果によりましては各國が建艦競爭になるかも知れません、なるだらうといふ覺悟は持つてをります。しかしこれに對しては、國民の一致したる意氣——これさへありますれば、我海軍は國力に相當するものを以て、國防の安固を期し得る確信を持つて居ります。要するに皆さんの覺悟、意氣、皆さんの一致したる決心、これさへあれば、十分この難關は切拔けられるだらうと思ひます。私は何等軍縮會議の改訂、または建艦競爭恐るゝに足らずと斷言し

て憚りません。

いづれにしても、神武天皇以來、光輝ある歴史と傳統とを有する我が大日本帝國、我々の祖先が血と汗とを以て築き上げたるところの、この祖先の墳墓の地、これを一歩たりとも敵に渡したならば何の顔あつて、我々は地下の我々の祖先に顔向が出來ませうか、出來ないだらうと思ひます。この意氣をもつて我々海軍の者は、さき程武富大佐のお話の通りに眞劍に目下訓練をしてをります。昨年の大演習の時にも無論私は三月間參りました。場所は先程武富大佐の話したようにどこか知りませんが、十分自信を持つことを研究したのであります。若し戰さをするならば將士は常に必勝の信念を以て戰に臨むものですから、此の點は御安心願ひたい。しかし之れには國民の熱烈なる後援が必要なのであります。

彼の友鶴の遭難——無論造船上のことも有りませうが、あゝいふことに立至つたのは卽ち我々が或る一種の猛訓練をやつてる犧牲であります。當り前のやり方では勝てない、どうかして勝ちたいといふので、或る特別なる非常訓練をやつてるのであります。その結果犧牲になつたのであります。

今夜は武富大佐が前に皆話してしまつたのでお話するところは外にないのであります。以上が私がこの席でお話申上げる要點であります。

前以てお斷り致しました通り、私、訥辯でありまして、うまく自分の肚の中を申上げかねるのでありますが、どうぞ私の熱誠のありまするところだけをお汲取下さいまして、若し一旦緩急ある時には、無論、私、氣の荒い飛行將校の親方でありますから一番先に飛出して參ります。その時に戰死を致しましたならば、どうか皆さんのこの今回のお企てによります軍艦旗の下に、喜んで死んだといふことをどうか覺ゑておいていただきたい。

これ以上私は軍人として申上げることはないのであります。（終）

昭和九年五月二十二日印刷
昭和九年五月二十七日發行

【定價拾錢】

大阪毎日新聞社編

發行兼印刷人　大阪府豐能郡箕面村字平尾四九九　荒木利一郎

印刷所　大阪市北區堂島上二丁目三六　株式會社大阪毎日新聞社

發行所　大阪市北區堂島上二丁目三六　大阪毎日新聞社

同　東京市麹町區有樂町一丁目一一　東京日日新聞社

不許複製

三六年の危機と
海國日本の使命

5.24

終

本社の定期刊行物
日刊 大阪毎日新聞
日刊 大阪毎日 東京日日 英文
週刊 サンデー毎日
週刊 駱字「大阪毎日」
毎月経済二回雑誌 エコノミスト
日刊 東京日日新聞